

Lesson3 キャッシュフローベースの経営指標

参照：「⑤販売・経営管理」第3章第3節 p.62-64

問1

以下の指標は何を評価するものか、端的に記せ。前掲の㈱リテマケについて、各指標を指定された位まで算出なさい。端数は四捨五入とする。

- ①営業CF対流動負債比率、小数点第1位
- ②営業CF対設備投資比率、小数点第1位
- ③インタレスト・カバレッジ・レシオおよびCF版インタレスト・カバレッジ・レシオ、小数点第1位
- ④CFマージン、小数点第1位

【解答例】

①短期支払能力

営業CF対流動負債比率：営業CF÷流動負債（%）
 $-20,857 \div 29,000 \div \blacktriangle 71.9\%$

②設備投資の安全性

営業CF対設備投資比率：営業CF÷設備投資額（%）
 $-20,857 \div 0$ 算出不可

③利息の支払能力

インタレスト・カバレッジ・レシオ：税引前事業利益（＝営業利益＋受取利息・配当金）÷支払利息（倍）

$(30,000+93) \div 6,200 \div 4.9$ 倍

CF版インタレスト・カバレッジ・レシオ：（営業CF＋支払利息＋税金（＝営業活動CF小計））÷利息の支払額（倍）

$650 \div 11,200 \div 0.1$ 倍

④本業の収益力

CFマージン：営業CF÷売上高（%）
 $-20,857 \div 1,000,000 \div \blacktriangle 2.1\%$

糸口：従来型との関連を考えて、何を営業CFに置き換えるのか？

計算問題の連続に「またか！もう勘弁してくれ！」と思う読者もいるかもしれない。しかし、CFを用いた経営指標分析も、恐れるには値しない。これらは

Lesson1で学んだ従来の貸借対照表・損益計算書を用いた経営指標分析をちょっとひねってCF版にただけである。また、Lesson1同様、すべて割り算である。だから、すべての計算式を個別に覚えるのではなく、既存の知識とリンクさせ、落ち着いて1つずつ学習していけば怖いことはない。

Lesson1では貸借対照表と損益計算書とを用いて、「安全性」「収益性」「効率性（生産性）」の視点から経営分析を行った。ここで取り上げる指標はすべて、そのCF版と理解してよい。

① 当座比率および営業CF対流動負債比率

支払いができなくなって降参することを倒産という。1年以内の支払義務がある、いわば請求書の束が流動負債であり、1年以内に現金化できるものが流動資産である。ただ、この流動資産のうち、棚卸資産（商品）は必ず売れるとは限らない。したがって、この商品を抜いた換金性の高い資産が「当座資産」であるとLesson1で学習した。

短期支払能力を測るために当座資産と流動負債とを比較したものが当座比率であり、100%以上を確保しておきたい指標である。ここから一歩踏み込んだのが営業CF対流動負債比率である。これは「CF版当座比率」と呼んだほうが通りがよいし、実際そう呼ばれている。

●図表2-3 当座比率、営業CF対流動負債比率

短期支払能力	従来型	CFベース
指標名	当座比率	営業CF対流動負債比率
分子（対象）	当座資産	営業活動CF
分母（基準：1当たり）	流動負債	流動負債

単位：%

では、なぜ分子に当座資産に代えて営業CFを用いるのか。たとえば㈱リテマケでは100%以上をよしとする当座比率で207.4%を確保しているから、支払能力に問題はなさそうである。

ところが、これをCF版にしてみると $\blacktriangle 71.9\%$ と非常に危険な状態に驚くだろう。なぜか。Lesson2で作ったCF計算書で営業活動CFをチェックしてみよう。売上債権が13,000千円増加している。つまり、売掛金の回収が進んでいないことがわかる。